関西自然保護機構会誌 *23*（*2*）：*193－194, 2001*

原　著

# 春日山原始林のキノコ

丸　山　健一郎

Mushrooms and other fungi in Kasugayama primeval forest. Kenichiro Maruyama

2001年9月8日に行われた関西自然保護機構と奈良県立自然博物館をつくる会共催の連続講演会「世界遺産春日山原始林の自然」で紹介した「春日山のキノコ」についてまとめておきたい。

春日山のキノコ相についての主な調査報告は，日本菌学会関西談話会（1965），大久保雅弘（1994），丸山健一郎（1996）がある。これら3つの報告からキノコを作る種についてみると，春日山周辺では333種のキノコが確認されていることになる。

各調査間で確認された種の重複をみると，日本菌学会167種について大久保との重複が62種，丸山との重複が47種。大久保158種のうち丸山との重複が71種。丸山155種。すべての調査で報告された種はわずかに33種であった（図1を参照）。

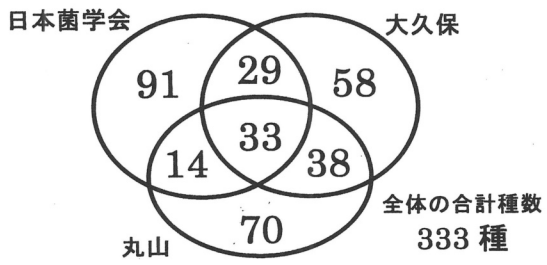



**図1．** 調査資料間の重複種数．Sφrensenの共通係数（CC＝2a／(2a＋b＋c, a＝資料間の共通種数，b＝非共通種数）で資料間の類似度を測ると，日本菌学会～大久保間で0.38，大久保～丸山間で0.45，丸山～日本菌学会間で0.29となる．

各調査間での重複は少なく，調査するほど確認種数が増えている状況にある。それぞれの調査年と期間，調査区の設定，採集・同定の能力差があるとはいえ，これだけ重複しないのであるから，キノコ相の把握が困難であることが推測できよう。春日山のキノコ相は，未だ十分に調査されているとは言い難い。

大久保の1987年と丸山の1995年の調査記録から春日山の照葉樹林のキノコ発生期について読みとれるのは，種数で見たときに年2回の発生ピークがあることである。月別に確認種数を集計すると7月の大きなピークと10月の小さなピークが見られる。

一般に気温上昇期の雨期には，テングタケ科やイグチ科，ベニタケ科といった菌根性のキノコが多く発生し，気温下降期の雨期にはキシメジ科やフウセンタケ科のキノコが見られるなど構成種に違いがあるといわれる（横山，1991）。春日山では7月のピークが気温上昇期の雨期，10月のピークが気温下降期の雨期にあたるが，7月のピークではテングタケ科やイグチ科（オニイグチ科も含めて），ベニタケ科のキノコの割合が多く，丸山の1995年の記録では，7月に確認されたハラタケ類55種のうち42種までがこれらの科に属する菌根菌であった。

林の優占樹種と発生するキノコについても関連するものがある。例えばモミと関係が深いキノコにはウスタケ，マゴジャクシなどがあげられる。

春日山に多いコジイでは，シイタケ，カンゾウタケ，オオワライタケなどが見られた。イチイガシでは，オオウロコタケ，コウヤクマンネンハリタケなどが特徴的といえるだろう。

東南アジア種といわれるキノコがある（本郷，1976)。日本（東北南部以南）～台湾，中国中南部，ヒマラヤ，フィリピン，マレーシア，インドネシア，ニューギニアにまたがって分布する種群で，本州の照葉樹林にも多いとされる。春日山で確認されたキノコで東南アジア種と考えられるものとして，シイタケ，オニテングタケ，テングタケダマシ，コナカブリテングタケ，ヒメベニテングタケ，カブラテングタケ，キイロアセタケ，オニフウセンタケ，オキナクサハツ，ムラサキヤマドリタケ，ミドリニガイグチ，オオウロコタケなどがあげられる。春日山のキノコ相では，これらの東南アジア種が比較的普通に見られることがひとつの特徴といえるだろう。

## 引用文献

大久保雅弘. 1994. 春日山のキノコ相.「奈良公園の自然」, 95－103. 奈良教育大学, 奈良.

日本菌学会関西談話会. 1965. 奈良春日山原始林の菌類. 日本菌学会会報 6 (1) : 27－31.

本郷次雄. 1976. 日本産きのこ類の分布について. 発酵と工業 3 (10) : 746－750.

丸山健一郎. 1996. 春日山西部のキノコ相. 奈良教育大学修士論文. 奈良教育大学, 奈良.

横山和正. 1991. 日本のきのこ. プランタ 18 : 21－26.